柿生文化

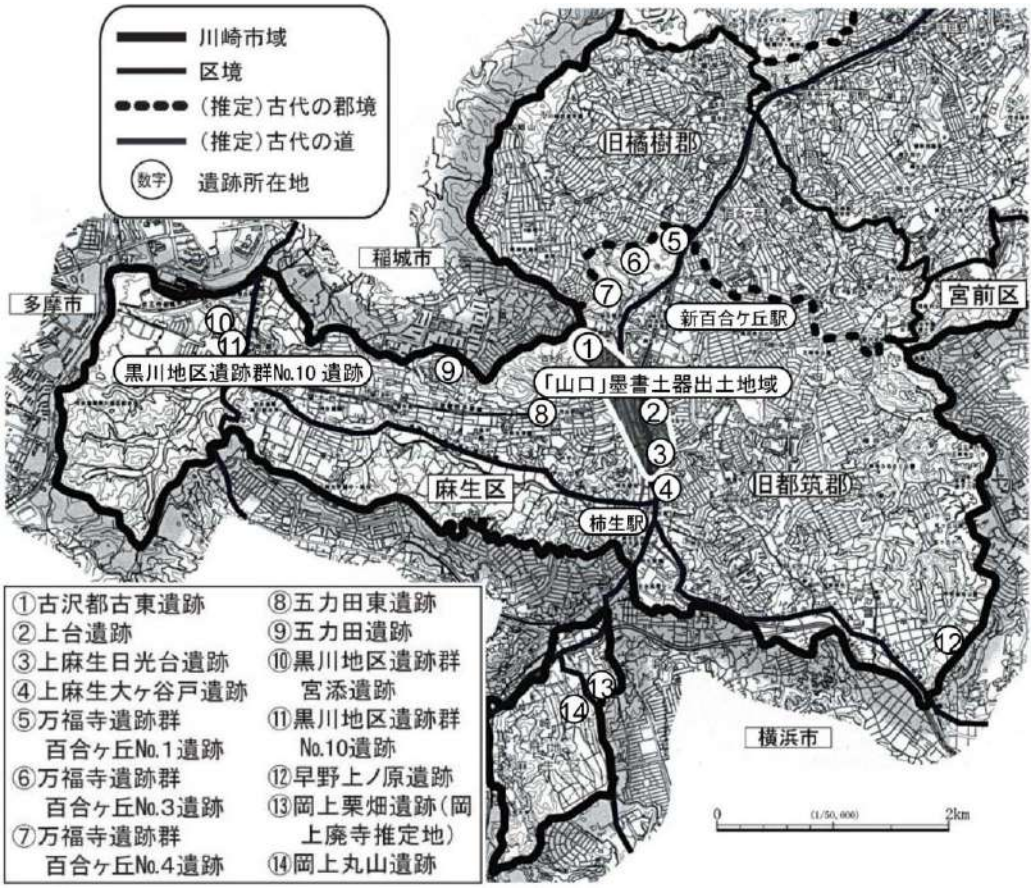
柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 122 号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
「川崎の文化財」-21

麻生区内における旧都筑郡地域の古代の様子を想像してみましょう（7）　～旧都筑郡地域の遺跡⑥～

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員　栗田　一生

今回は、「麻生区内における旧都筑郡地域の古代の様子を想像してみましょう」の第7回目です。これまで、麻生区の西側にあたる、旧都筑郡地域における遺跡についてご紹介してきましたが、今回がいよいよ最終回となります。



前回は、旧都筑郡地域で「山口」や「口」と書かれた墨書土器が出土する地区が、多磨郡と都筑郡、多磨郡・橘樹郡と都筑郡に近接する郡境の地域であった可能性をお話ししました。また、この地区の古沢都古東遺跡で出土した「厨」と書かれた墨書土器から、厨家が役所や寺院等の公的な施設の厨房施設であるとともに、公的な行事や饗宴の場によって移動するものであることから、この墨書が「厨」であれば、この場所で厨家が置かれるような行事、つまり都から派遣された国司が国内の視察で郡から郡へと移動する際、郡境付近で饗宴が開かれた際のものではないかと推測しました。

今回は、古代の日本において、こうした郡境等といった境界にあたる地域では、境界を守護するため神仏の加護を求めた例が多いという話をしたいと思います。前回までお話ししてきた「山口」という呼称は、「口」という単なる境界という意味以上に、異界と日常を隔てる山、信仰の対象となってきた山の出入口という意味で、全国の地名や神社等の名前に見られます。現在、小田急線沿線地区にその名を表すような神聖な山や神社等は見られませんが、山口台遺跡群の上台遺跡では、12号住居（HT-12）から仏教的色彩の強い、体部に稜をもつ須恵器稜碗が出土しているとともに、有力者の居宅である可能性が高い三面に廂を有する6号掘立柱建物（HO-6）等も確認されており、直接的な資料は発見されていないものの、集落内で仏事を行っていた可能性や、有力者の居宅が仏堂的な施設として利用されていたことが想定されています。この上台遺跡とその南側に位置する上麻生日光台遺跡は、大型の掘立柱建物が規則的に配置され、一般的な集落では見ることができない様相があることから、これらの遺跡が郡境を守る拠点として位置づけられていたことが推測されます。さらに推測に推測を重ねれば、境界を守護するための仏事を行うことで、ここが仏が住まう土地という認識がもたれ、上台遺跡が所在する地を日常社会とは異なる異界の地＝山であると捉え、その境界の出入口であるこの地を「山口」と呼ぶようになったのではないかと考えられるかもしれません。また、多磨郡との境界に近接し、「口」と書かれた墨書土器が出土している黒川地区　No.10遺跡の西側に隣接する宮添遺跡からは、「寺」と記された墨書土器が出土しているとともに、高台に建てられた掘立柱建物（1・2号掘立柱建物）周囲から瓦塔片が発見されています。この建物は、瓦塔を祀った仏堂であった可能性が高いと考えられており、やはり境界の地を守護すべく仏教の力を借りようとした可能性をうかがわせる状況といえます。

約2年間、旧都筑郡地域における遺跡の様相についてお話ししてきました。この地域は、現在も、多くの遺跡が地下に眠っており、今後の発掘調査によっては、この地域の歴史を解明する貴重な発見があるかもしれません。またいつか、みなさまにそうした地域の歴史を紹介できればと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（おわり）

シリーズ
「麻生の歴史を探る」　第92話

日野往還 ～神奈川道～

小島　一也（遺稿）

麻生水処理センターの西隣は町田市能ヶ谷町ですが、そこに今でも”一本松”と呼ぶところがあります。ここは前稿旧津久井街道と、神奈川（横浜）-日野（八王子）を結ぶ日野往還が合流した場所で、今は全くうらぶれた街角にすぎませんが、ここの三叉路に「左 江戸　東 神奈川　西 八王子」と記されていたという、今は全く摩耗した高さ70cmほどの石塔があり、当時の名残を留めています。この日野往還は現水処理センターから鶴川を経て日野に行きますが、その始点は神奈川（横浜）で神奈川道とも呼ばれます。この神奈川道にはもう一つ八王子道と称する街道があり、これは小机で日野道と分かれ、鶴見川南岸を鴨居・中山・長津田を経て町田から八王子に行きます。一方の日野往還は鶴見川北岸、多摩丘陵の山麓を縫って、小机から佐江戸・茅ケ崎・市ヶ尾・鉄・麻生・鶴川・犬蔵・野津田を経て日野（八王子）に達するもので、その特徴は鶴見川本支流域を南北に分け、沿線に農穣の地を持ち比較的平坦に東西に伸びていることです。

一本松三叉路の石塔

日野往還と屋号（「屋号と家紋」より編集者作成）

小田原北条の戦国時代には、北条氏の南武蔵支配の拠点として、この街道沿線には小机城を主城とする、篠原・佐江戸・茅ケ崎・荏田・亀井・沢山・榎下（八王子道）・成瀬（八王子道）城などが構築され、軍事道として人馬の賑わいを見せますが、江戸時代になると ”江戸百万町民の消費は、道を江戸に通ず“ 、江戸と南武蔵・相模を東西に結ぶ津久井街道・矢倉沢往還（大山道）・中原街道（丸子茅ケ崎線）が農産物等を江戸に運ぶ物流の道となり、中でも矢倉沢往還は雨乞い、不動信仰の参詣人の道ともなり、その中心荏田宿は市が立つほどの賑わいとなり、その陰で日野往還・八王子道は、江戸道に人馬の往来を奪われて人の流れが絶えていきます。

この日野往還が再び人の流れを取り戻すのは、安政五年（1858）日米通商条約が結ばれ神奈川港が開かれた頃と思われます。それは前稿（津久井街道）で述べたとおり、八王子に集積されていた相模・津久井・南多摩などの製糸産業が江戸から横浜へ流れを変えたからで、そのことは冒頭述べた旧津久井街道に栄えた竹の花宿（文政年間 1818～）に代わり、わずかに南に離れた日野往還の道筋には、今でも宿（旅籠）、橋場（酒屋）、新橋屋（茶店）などの屋号が残され、街道の人の流れの変化を物語っています。

時代は降って明治の時代（1868～）、この日野往還は、麻生のこの地方にとって重要な道路となります。それは明治二十二年（1889）、町村制施行で上麻生村ほか10ヶ村は柿生村を誕生させ、都筑郡となるからで、この10ヶ村は鶴見川本支流域の日野往還に沿う村々です。そして中心が日野往還沿いの川和であり、明治・大正そして昭和の初期、そこには郡役所・警察署・郵便局・農業会などがあり、生糸・絹織物・農産物など買取商人の出会い茶屋があり、荷を卸し、政治・経済の町として繁栄を続けます。だがそれは、長い間のことではありませんでした。当時の国鉄横浜線の試験電化が大正十四年（1925）、そこには小机・中山・長津田の駅ができました。小田急線柿生駅の開設は昭和二年（1927）。横浜、川崎二大都市の膨張は昭和十四年（1939）川和町ほか9ヶ村は横浜市へ、柿生岡上村は川崎市に編入、都筑郡は解消され、幾多の歴史を秘めた日野往還は過去の道に変わっていきます。

私は昭和二年生まれですから、都筑郡最終の郡民で子供のころ友人と小机・川和に遊びにいった覚えがあります。幅4mなど比較的平坦な砂利道で、小机耕地（現アリーナ辺）で海老蟹（編集者注:ザリガニ）を捕ったこと、池辺耕地（現神奈川運輸支局）辺は低地で鶴見川が氾濫していたこと、川和の郡役所は西洋風の建物でそこには前田さんと呼ぶ小学校の教科書屋さんが在ったこと、沿道には川和の中山恒三郎商店（酒・醤油問屋）・市ヶ尾の綿屋（不詳）などの豪商の店が在ったことが懐かしく思い出されます。

今、日野往還は”麻生道”と名を変え、昭和三十九年（1964）往年の竹の花宿を眼下にした柿生陸橋が開通、車両の絶え間を見せず、母なる鶴見川は、全くその姿を変えながら流れを続けています。

参考資料:「柿生村と私の歩み（飯塚重信）」「青葉のあゆみ（青葉区役所）」「津久井街道（稲田図書館）」「横浜の歴史の舞台を歩く（相澤雅雄）」

シリーズ
教育の歩み 第１部

学校の誕生と成長（10）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆活版印刷の普及と識字能力◆

印刷会社は、印刷機を備え、植字工や金属活字鋳造工を雇い、さらに当時なお高価な品だった紙を用意し、活字合金も手当てしなければなりません。その限り機械設備の外にかなりの流動資金を手当てする必要がありました。そのためには、次々に注文が入り、飛ぶように売れる作品を供給する必要がありました。分厚い高価な本は、一定数の注文が揃ってから生産に取り掛かる注文生産とすることでリスクを回避し、日常的には小型でページ数の少ない、その上今日の幼児用絵本のような文字数の少ない、挿絵中心の物語が大量に供給されたのです。当然、そこで使われる言語は、ラテン語ではなく、現地語でした。

こうして書物は知識の保存だけではなく、知識の伝達を媒介するようになったのです。こうなると、簡単な絵物語程度は、自ら読めるようになりたいという欲求を持つ人たちも増えてきます。ルターの支持者たちは、巧みにこの欲求を利用し、ルターの宗教観を様々な絵物語に落とし込み、その邪魔をしようとするローマカトリックを敵役として登場させることで、支持者を増やしていったのです。

プロテスタントの基本戦略は、ローマ教会による聖書と教義の独占を打破する事にありました。そのためには民衆の識字能力を高め、聖書や教典を読んで理解できる人を増やすことが必要でした。民衆の側でも、「文字を覚えれば自分で聖書や教典を読むことが出来る」と理解できたため、俄然文字を覚えたいという欲求が高まってきたのです。こうして初等教育への願望が芽生えます。まだ組織だった学校の建設には至りませんが、プロテスタント教会を通じた俗語（現地語）の読み書き学習が始められたのです。16世紀末から17世紀初頭にかけてのことでした。

ここにもう一つの要素が加わります。それは日本の戦国時代から織豊政権への歩みと同じく、諸国分立の状態から統一王権の誕生への歩みが、欧州各国で続いたことです。受験世界史で言う絶対王政の登場です。今日では、高校世界史を除くと、ほとんどこの語は使わなくなっているのですが、ここでは話を分かりやすくするために、あえて使うことに致しました。ご寛恕ください。

強力な王権は、自らの正統性を強化するために、各地でバラバラな地域語を統一して、国語を形成する事を目指しました。パリ中心のイル・ド・フランス地域の地域語に過ぎなかったオイル語が、やがて北フランスの共通語となり、遂には全フランスを網羅するフランス語となったり、トスカーナ地方の地域語だったトスカナ語が、やがて全イタリアを網羅するイタリア語となったのは、その例です。

『神の水車』と題する小冊子の挿絵
当時の民話を利用して、ルターの教えがカトリックの教えよりも優れていると、印象付けている。

こうして、強力となった王権は、文字を読めるようになりたいという民衆の願いを利用する形で、主として識字教育を施す初等学校の設置を進めることを考えるようになります。勿論そこでは各地の地域語ではなく、支配領域の隅々まで同一の言語が使われるのです。これは皆さんの中でも初耳の方が多いと思いますが、欧州各国の先頭に立って、17世紀前半の段階で国内隅々にまで初等学校を網羅して、国民の識字能力を男女含めて80％以上に高めた国がありました。ノーベル賞でお馴染のスウェーデンです。当時のスウェーデンは、バルト海を支配する北の大国でした。そのスウェーデンが中央集権化の施策の一つとして、王命の下、ヨーロッパで最も早くルター派プロテスタントを国教とした国教会を作り、国内全ての教会に、ルター派の訳したスウェーデン語の聖書を常備させ、国民にも読むようにと指示したのです。初等学校のほとんどは、教会の施設の一部を使って行われたこと、当面文字を書くことよりも、読むことに力点が置かれましたので、読むことは確実にできるけれども、書くことは怪しいという国民も多かったようですが、それでも女性を含めて80％の人がスラスラと字が読めるというのは、当時としてはとんでもない高率でした。

『ウィッテンブルクの鶯』と題する小冊子の挿絵
ルターの鶯が闇に太陽の光を齎したとしている。

◆カトリックの対応◆

印刷術の利用や民衆の識字教育について、プロテスタントに大きく遅れをとっていたカトリックも、16世紀の80年代に入る頃になると、遅ればせながら民衆の教化に最小限の識字教育が欠かせないことを、認めるようになります。今までも、都市や農村の教会に、子ども達に文字や計算を教える教区学校が併設されていたのですが、通学する子どもの数も少なく、あまり熱心に取り組まれていなかったのです。教区学校は、無償の慈善学校ではなく、有料だったことも影響していました。

（続く）

川崎市立日本民家園に移された麻生の歴史６

伊藤家の月待供養板碑

旧伊藤家については第96号の本コラム第１回目で紹介いたしましたが、今回のテーマ月待供養板碑はその伊藤家の畑から出土したものです。

残念ながら周囲が大きく欠損した断片で、実寸は長さ 51cm、最大幅 29cm ですが、元は長さ１ｍ 近く、幅は 31cm ほどはあったと見られています。材質は一般的な秩父産の緑泥片岩で、銘文は「□□禅門　袈裟子／妙□禅尼右馬次郎／永正五年辰／奉月待供養／十一月廿□」と読めます。日付は他の板碑から類推すると23日であろうと思われますが、この日は新嘗祭（収穫を神に感謝する祭り、現在は勤労感謝の日）です。永正五年は 1508 年で、すでに戦国乱世が始まっていたこの時期にあっても、この地方に村が成立、農業が定着し、生活をいそしみ楽しんでいたことがうかがえます。

月待供養とは二十三夜などの遅い月の出を待って村人が寄り合い、飲食を共にして遊び、語る、そして経などを唱えて月を拝み、悪霊を追い払うという行事です。複数回にわたって行われ、それを記念して板碑が造立されたものと思われます。

逆修（ぎゃくしゅ）供養板碑の一種ですが、逆修とは生前にあらかじめ自分の死後の冥福を祈って仏事を行うこととされます。平たく言えば、自分はこれだけ善人なんだと閻魔様に訴えることでしょうか。

対になるのが追善供養ですね。岡上の梶家には現存するものとしては市内最大、最古とされる板碑が保存されています。1267 年の銘が刻まれ、高さは 140cm もあります。戦乱時の死者に対する供養塔とされています。

（伊藤家の板碑は現在公開されていません。）（有泉 眞男）

柿生郷土史料館催物案内　【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

7月　1・8・15・22 日（毎日曜日）　**8月**　4・11・18・25 日（毎土曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時

サマースクール

ステンドグラス　どうやって作る？

ご一緒にステンドグラスを作ってみませんか。お好きなガラスを選んでオリジナル作品が作れます。

日　時　**平成29年8月18日（土）　午後１時～3時**
会　場　柿生中学校 金工･木工室
講　師　栗山　美咲先生（王禅寺在住）
対　象　小学校3年生　～　中学校3年生　　先着 30 名まで
参加費　1名につき 500 円　（材料費等の実費　当日徴収）
持ち物　上履き、飲み物（ペットボトル可）、軍手、雑巾、エプロン
申し込み　氏名、学年、学校名、連絡先電話番号と FAX 番号またはメールアドレスを記載して、下記までファックスまたはメールで申し込んで下さい。
なお、メールで申し込まれた方は、PCメールの受信拒否は解除願います。
申し込み先　小林　044-989-0757（FAX 専用）　zabi@za.wakwak.com
締め切り　8 月 4 日（土）
問い合せ　柿生郷土史料館企画担当　小林基男

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページ http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo をご覧ください。